理事長あいさつ

理事長　三輪　浜子

平素より連合会運営に深いご理解とご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。また、新型コロナウイルスのオミクロン株の感染拡大を受け感染防止対策および事業継続に取り組まれ、多忙な日々をお過ごしのことと思われます。

対面支援が主体の福祉業界の環境も大きく変わり、コミュニケーションの手段、環境の整備、資質の向上、ネットワークの構築等の確保に意欲的に取り組むことで、十二月十一日（土）に第三回作業所学会が、昨年同様リモートにて開催することができました。重ねて感謝申し上げます。

作業所学会の要旨は、小規模、多機能、地域密着であると同時に、『障がいのある人がひとりの市民として地域に生きてこそ「ふつうの暮らし」である』という指針は作業所の揺るぎない理念です。作業所は、障がいのある人たち一人一人の尊厳と権利が尊重される場であると共に、地域社会の一員として、働き、暮らしていく拠点としての役割を担うことで、地域の人々、関係者と共にインクルーシブな社会を実現してきました。その実践を通じて私たちが培ってきた文化は、協働を通じて人と人が交わり相互に育ちあうといったものです。ケアの本質的要素を包含したこの作業所文化は、長きにわたり制度から隔てられた中であったからこそ形成されてきたとも言えます。

今回、ケアの考え方、動機付け、意思決定等について上智大学グリーフケア研究所、特任教授浜渦辰二先生に、ケアの臨床哲学「事始め」について講話を頂きました。受講された方は、自分も相互依存する社会の当事者であり忘れがちな謙虚な気持ちと姿勢について再認識ができたのではないでしょうか。

また、午後の分科会、全体会は、「当事者にとって作業所とは」として、各分科会から多くの事例を通して学びあう機会となりました。

最後に、日々の実践を「作業所学」として昇華し、共に学び合い、発信していく共同意思決定の場となるよう継承していきたいと思います。相手を思いやる気持ちや曖昧性を理解する、問題行動を起こす相手の立場を思って考え抜く、利用者も職員も気持ちを開示しお互いのことを受け入れることで、インクルーシブな社会に繋がると思います。